

The fluctuation of the seigneurial finance : Saint-Lager in the 17th and 18th centuries

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜田, 道夫, HAMADA, Michio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20608/00001039

原著

領主財政と変動局面 — 17・18世紀サン＝ラジェ領の場合 —

浜田 道夫¹⁾

The fluctuation of the seigneurial finance : Saint-Lager in the 17th and 18th centuries

Michio HAMADA

要旨

アンシアン・レジーム期の領主制を所領の経済構造から検討することは一つの有効な方法であるが、その実態的解明のためには、構造分析のみならず変動分析が不可欠である。本稿では、ボージョレ地方サン＝ラジェ領を例にとり、領主権力の財政基盤を所領収入の変動をとおして探ってみる。

17～18世紀をつうじ、サン＝ラジェの領主財政は次の点で特徴的であった。1) 所領収入の約40%が領主的諸権利にもとづいていること。2) 所領収入のブドウ収穫高への依存度は18世紀が進むにしたがって高くなり、収入（とくに封与10分の1税および小作料）の短期・長期の変動はブドウ酒価格とほぼ連動する。3) 封建地代であるサンスは代金納であるため、そこからの収入は価格変動にもかかわらず実質価値を維持している。こうした傾向が重なり、所領の財政規模が拡大する一方で、領主的諸権利への依存度の高い収入構成が保たれた。

フランス革命により領主的諸権利が廃止されたため、サン＝ラジェの領主財政は急激な変化を強いられるが、領主はいまや近代地主に変貌している。

キーワード：領主制、所領収入、価格変動、構造と変動

Abstract

To understand the characteristics of the seigneurial system in France's Old Regime, it is important to examine its finance. The objective of this article is to investigate various aspects of seigneurial revenue as it fluctuated at Saint-Lager in Beaujolais. Documents show three characteristics regarding finance in this system: 1) 40% of seigneurial revenue came from feudal rights; 2) revenue (principally seigneurial tithe and *métayage*) depended more and more on the

1) 本学学長

grape harvest (especially since the beginning of the 18th century), and on the whole, revenue fluctuated along with the price of wine; and 3) the *cens* (feudal rent), based on commodities but paid in money, was not influenced by price fluctuation. In other words, it kept its real value. Thus, prosperity in the second half of the 18th century brought a certain vivacity to seigneurial finance. However, the Revolution forced it to accept brutal change in abolishing feudal rights. Then the seigneur became the modern landowner.

Key words: seigneurial system, revenue of seigneurie, movement of prices, structure and fluctuation

はじめに

筆者はこれまでに、アンシアン・レジーム期の領主制度を所領の経済構造および領主裁判の組織と機能の面から考察してきた。その際、主な調査対象としたのが、フランス南東部に位置するボージョレ地方のサン＝ラジェ領であった。北東部の穀物生産地帯に対し、この地方はブドウ栽培地帯に属することから、折半小作制など固有の土地問題を包摂する領主制によって特徴づけられることはすでに示したとおりである¹⁾。そこでは、サン＝ラジェ領の経済構造を所領経営の観点から明らかにしたのだが、領主制の実態解明のためには、構造分析にとどまらず、その構造が種々の経済変動のなかでどのような影響を受けるのかという変動分析に取り組むことが課題として残った。

この点はとりわけ領主権力のあり方にかかわる問題でもあり、筆者が領主裁判に取り組むにあたり避けて通ることのできないテーマであった。すなわち、領主権力の具体的発現として領主裁判があるならば、領主裁判を維持するための費用はどのように確保されたのかという問題である。そこでは領主権力の財政基盤が問われるのだが、この基盤は変動局面のなかにあってつねに不動というわけではない。領主財政と領主裁判との関係については別稿を準備しているが²⁾、本稿ではさしあたり、経済変動とともに推移する領主財政、具体的には所領収入に焦点を合わせることで、領主制のいわば活力を測

ることに目的を限定したいと思う。

史料としては、ローヌ県文書館所蔵の『キュジュー家文書』(Fonds Cuzieu)を使用する³⁾。この文書は、フランス革命後にサン＝ラジェ領主ダフォーの後継の娘が、隣接するフォレ地方の領主キュジュー家に嫁いだことにより、サン＝ラジェ領関係の文書の所有権が移転したことによって由来している。16～18世紀の長期間を覆うこの膨大な史料は、それ自体貴重であり、筆者もさまざまな問題意識に導かれながら利用してきた。ただ本稿は、領主財政・所領収入を変動局面のなかでたどろうとするが、そのために必要な連続した史料が必ずしも十分に残されているわけではない。その意味では、本稿はこの分野での「系列史」(histoire sérielle)をめぐる一つの試論にすぎない。

1 所領収入の構成

まず、領主財政を構成する所領収入を、領主的諸権利からの収入と領主直領地からの収入に区分し、全体に占めるそれぞれの割合を比較してみよう。この点は、所領経営のあり方、あるいは当該時期の領主制の性格を知るうえで重要である。

『キュジュー家文書』には、サン＝ラジェ領の収入構成を知る手がかりとなる史料が2種類残されている。一つは1673年における所領の総請負に関する史料である。同年、サン＝ラジェ領主トリヨンの商人とのあいだで所領の総請負契約が結ば

れた際、所領収入の年額が収入費目ごとに評価された⁴⁾。表1はその評価額を、サンス（貴族地代）や封与10分の1税など領主的諸権利からの収入と、ブドウ畑・穀物畑・採草地・森林など領主直領地からの収入とに区別して整理したものである。領主的諸権利からの収入が領主の封建領主としての側面に由来するのに対し、直領地からの収入は小作料や土地の直接経営からの収入であり、領主の地代取得者としての側面、さらにいえば形成されつつある近代地主としての側面に由来している。表に示されるように、所領収入の評価総額6,094リーヴルは、領主的諸権利からの収入2,634リーヴル（43%）と領主直領地からの収入3,460リーヴル（57%）によって構成されている。ただし、これらの金額はあくまでも総請負契約時における収入評価額（見積額）であり、実際に得られた収入ではないことに留意しなければならない。

表1 所領の収入評価額内訳（1673年）

	収入種目	収入評価額 (l)	構成比 (%)
領主的諸権利	サンス(貴族地代)	1,000	
	市場税		
	九柱戯税	100	
	領主裁判書記請負料		
	罰金		
	封与10分の1税		
直領地	大10分の1税	1,500	
	小10分の1税	34	
	小計	(2,634)	43
	ブドウ畑	1,500	
直領地	穀物畑	400	
	採草地	810	
	森林	200	
	城内	550	
	(菜園・鳩小屋・採草地・養禽場)		
	小計	(3,460)	57
	合計	6,094	100

史料：Fonds Cuzieu, Liasse 25, La copie de ce que j'ai écrit au bas du dénombrement des revenus, 1673.

もう一つの史料は1780年代に作成された「サン＝ラジェおよび付属領収入簿」（1782年8月30日から1790年12月11日まで）である⁵⁾。表2はそこに記された収入額を8年平均（最後の4ヵ月を除く）で見たものである。ただし、「収入簿」の記入者によれば、ここでは直領地からにせよ封与10分

の1税からにせよ、小麦・燕麦・麻・家禽・鶏卵・バターの収入が含まれていない。また、この時期にはブルイ山やヴィリエ村にあるサン＝ラジェ領主所有の森林が3分の1分益（領主3分の2）で貸し出されており、1785年には領主は薪600束を得ているが、その毎年の貨幣換算額が計上されていない。

表が示すように、この間の年平均収入額は13,983リーヴルとなり、サンスや封与10分の1税を中心とする領主的諸権利からの収入が5,491リーヴル（39%）、小作料（ブドウ酒販売）を中心とする直領地からの収入は8,492リーヴル（61%）にのぼる。また特徴的なことは、封与10分の1税（4,282リーヴル）と直領地からの小作料（6,424リーヴル）をあわせた「ブドウ酒販売」による収入部分が大きく（計10,706リーヴル）、年収全体の76%を占めることである。前述の1673年の総請負契約では、封与10分の1税（ここでは穀物も含まれている）とブドウ畑からの小作料収入の合計は収入評価額の50%を示しており、約100年のうちに所領収入のブドウ収穫量への依存度はそれだけ強まったことがわかる（ちなみに、封与10分の1税や直領地の小作料のうちブドウ収穫分については、いったんサン＝ラジェ城に集められた収穫がブドウ酒に醸造されたのちに、領主が自己の取り分を徴収するというかたちをとる）。

表2 所領の収入構成（1782～90年平均）

	収入種目	収入 (l)	構成比 (%)
領主的諸権利	サンス	708	
	保有地移転税	288	
	パンシオン	153	
	市場税	60	
	封与10分の1税 (ブドウ酒販売)	4,282	
	小計	(5,491)	39
直領地	ブドウ酒販売	6,424	
	干し草販売	1,247	
	定額小作料 (採草地)	602	
	店舗家賃	237	
	小計	(8,492)	61
	合計	13,983	100

史料：Fonds Cuzieu, Liasse R, Livre de compte de la recette, 1782-1790.

上にあげた二つの史料は、いずれも所領の収入構成を正確に知る根拠とはかならずしもならないし、それぞれ性格が異なることから両者を直接比較することにやや無理があるかもしれない。それでもあえていえば、この間すなわち 1670 年代から 1780 年代のあいだ、所領収入全体に占める領主権依存部分と直領地依存部分の割合は大きく変化することなく、それぞれ 30～40% および 60～70% で推移したと思われるのである。

一方、表 1 と表 2 に示されるように、所領の収入総額は 1673 年には 6,094 リーヴル（評価額）であったが、1780 年代には 2 倍以上の 13,983 リーヴル（8 年平均）に達している。そこから領主財政の規模が拡大したことがわかるのだが、それでもこの間、収入構成に大きな変化は見られなかったわけである。以下ではそこにいたった事情を、所領収入の変動面から検討してみたい。

2 所領収入の変動

所領収入の変動をたどるにあたり、現存の史料で手がかりとなるのは、まず所領の総請負契約に見られる請負料、封与 10 分の 1 税からの収入、そして土地台帳を根拠とするサンスからの収入である。

(1) 所領経営の請負料

所領の総請負に関する契約書は、1600 年前後に

ついて 2 件、1671～1701 年に 5 件残されているだけである。この時期以降、総請負はほとんど行われなくなったと思われる。というのも、18 世紀の史料は「領主権管理人」(commissaire aux droits seigneuriaux) がサンスなど封建地代の徴収を所領収入全体から切り離して請け負っていたことを伝えているからである。一方で直領地の経営および封与 10 分の 1 税の徴収は、城館に住み込み、領主の家政を差配する「城の会計係」(économe du Chateau) が担当することになる。時期によっては、大 10 分の 1 税（ブドウ酒・穀物）を村の「住民」が、また小 10 分の 1 税（野菜・麻など）と市場税・九柱戯権を「住民」やヴィニュロンが請け負ったこともある。ともあれ、残された史料からいくつかの特徴をあげてみよう。

表 3 は各時期の所領の請負契約の内容を、契約日、請負人の職業、契約期間、請負料に沿って整理したものである。

16 世紀末以降サン＝ラジェ領は、ド・シャルドネ家の長子および末子の 2 人の「共同領主」(co-seigneurs) によって 3 対 2 の割合で所有されており、それぞれの持ち分ごとに請負に出されていた。1615 年、所領の 5 分の 2 が年額 500 リーヴルでヴィリエ村の国王公証人に請負われたが、この計算でいくと所領全体の請負料は 1,250 リーヴルになる⁶⁾。17 世紀後半には 1600 年前後に比べると請負料は名目的には 3 倍以上増えてはいるが、期間をつうじほ

表 3 所領の請負契約

契約日	請負人の職業	契約期間	請負料
1587.11.16	ベルヴィルのブルジョワ	4 年	250 エキュ(*)
1615.10.14	ヴィリエ村の国王公証人	6 年	500 リーヴル(*)
1671. 1. 29	リヨンのブルジョワ	9 年	4,000～4,500 リーヴル
1973. 4. 5	リヨンの商人 (2 名)	9 年	4,000～4,500 リーヴル
1681. 6. 28	リヨンの商人	9 年	4,400～4,500 リーヴル
1694. 11. 6	モンメルルのブルジョワ	6 年	3,500～4,000 リーヴル
1701. 7. 6	リヨンの商人 (父子)	6 年	4,000 リーヴル

注：*印は、所領の 5 分の 2 についての請負料。

史料：Fonds Cuzieu, Liasse 25, Baux à ferme de la seigneurie.

とんど停滞している。1671年にはリヨンのブルジョワが9年契約で請負うが、請負料は最初の年に4,000リーヴル、残りの8年については年額4,500リーヴルというものであった⁷⁾。これと同じ条件で、1673年には2名のリヨンの商人が請負契約を結んでいる⁸⁾。1681年に結ばれた9年契約では、請負料は最初の6年については年額4,400リーヴル、残り3年については年額4,500リーヴルであった⁹⁾。1694-1695年はサン＝ラジェ領が南仏プロヴァンス徴税区の財務官ガスパール・ジュルダンによって購入された年であるが、それ以来、請負料は従来よりも少し安くなっている。すなわち1694年の契約では、請負料は最初の2年間に年額3,500リーヴル、残りの4年間には年額4,000リーヴルであった。ただし、請負人であるモンメルルのブルジョワは契約開始時に、新領主ジュルダンの夫人に金貨20ルイを差し出さねばならなかった¹⁰⁾。そして1701年の契約では、6年の契約期間中、請負料は年額4,000リーヴルに固定されている¹¹⁾。少なくともこの時期には、所領収入の増加に大きな期待は寄せられなかったと考えられる。

実際、史料は17世紀後半における所領経営の困難さを伝えている。1671年に経営の請負を始めたリヨンのブルジョワは、2年後に領主に対し訴訟を起こしたのち請負を放棄している。というのも、契約1年目に請負人が徴収するはずの所領収入の額が契約に示された請負料に達しなかったからである。このあと1673年に、リヨンの商人2名が代わって総請負契約を結ぶが、当初、所領からの収入は年に6,094リーヴルと見積もられていた(表1参照)。理屈のうえでは、見積額と請負料との差額が請負人の利益となる。この契約では、少なくとも1,500～2,000リーヴル程度の利益が見込まれるのだが、その実現はままならなかったようである。留意すべきは、この間に契約を更新した請負人は1人もいないことであり、そこから、少なくとも17世紀後半における所領収入の停滞という現実を垣間見ることができるだろう。

サン＝ラジェ領が差し押さえられ競売にかけられたのは、こうした状況下であった。まず、1683年に所領の5分の3が、続いて1691年には残りの5分の2が差し押さえられ、それぞれの部分が新領主となるジュルダンによって1694年と1695年に落札されている。その際、所領の5分の2が30,000リーヴルで落札されたことがわかっている¹²⁾。単純に計算すれば、所領全体は75,000リーヴルで評価されたことになる。一方、前述のとおり1694年には3,500～4,000リーヴルで所領の総請負契約が結ばれたのであるから、投資額に対する年収益の比率は5%前後ということになる。新領主ジュルダンにとっては20年ほどで元手を回収できるわけであり、それ自体はリーズナブルな投資であったといえるだろう¹³⁾。

(2) 封与10分の1税の収入

サン＝ラジェ領主は、13世紀中葉にリヨンのサン＝ポール教会参事会(Chapitre de Saint-Paul de Lyon)に対し封臣としての「忠誠の誓い」(foi et hommage)を行い、見返りにサン＝ラジェ村における収穫10分の1税徴収権を与えられた。「封与10分の1税」(dime inféodée)といわれるものであるが、この場合サン＝ラジェ領主はその3分の2を自分のものとし、残り3分の1はサン＝ポール教会とサン＝ラジェ村の司祭とで折半されることになっていた¹⁴⁾。18世紀については、サン＝ポール教会がその徴収をサン＝ラジェ村の「住民」(habitant)に請け負わせた際の契約書がいくつか残されている。その請負料の推移を調べることで、村全体の収穫量の動向、そしてサン＝ラジェ領主が徴収する封与10分の1税の動向をある程度知ることができるだろう。表4はこれらの請負契約書をもとに各時期の請負料をたどったものである(契約期間は1737年の9年を除きいずれも6年)¹⁵⁾。

表4 10分の1税請負料の推移（サン＝ポール教会）

契約年	請負料 (L)
1702	250
...	...
1717	250
...	...
1737	300
...	...
1755	380
...	...
1761	340
...	...
1777	600

史料：Baux à ferme de la dîme.
A.D.Rhone, 13G 891 etc.

表に示されるように、請負料は18世紀初頭から中葉にかけて、250リーヴルから340～380リーヴルへと少しずつ増額され、さらに1770年代には600リーヴルに達している。ここでみる限り、10分の1税に対するサン＝ラジェ領主の取り分、すなわち封与10分の1税も増加傾向をたどったと推察される。

ところで、10分の1税の対象は主としてブドウと穀物の収穫であるが、ブドウに限っていうと、その収穫量の長期的な推移を大まかながらたどることができる。表5は、「10分の1税共同徴収者」co-décimateurs（サン＝ラジェ領主、リヨンのサン＝ポール教会、サン＝ラジェ村の司祭）のあいだで分配される前に、城館に集められた「ブドウ収穫10分の1税」（dîmes de vendanges）の推移をみたものである¹⁶⁾。17世紀中葉から18世紀末までを対象としているが、史料の欠落が多く正確な動きを確定することはできない。また、史料で使われているブドウ収穫量の単位「ベヌ」（benne）はもともと収穫用の背負い籠を意味するが、1ベヌが実際にどれくらいの分量にあたるのか現在では不明である（ただし、分量単位がどうであれブドウ収穫量の変動をみるうえでさしつかえはない）。いずれにせ

よ、毎年集められるブドウ収穫はいったんブドウ酒に醸造されたうえで、その3分の2が、封与10分の1税としてサン＝ラジェ領主のもとに残るわけである。

表5 ブドウ収穫に対する10分の1税（サン＝ラジェ村）

年	徴収量 (籠)	年	徴収量 (籠)
1644	412	1677	1,026
...	...	1678	915
1647	731
1648	319	1703	859
1649	573	1704	716
1650	333	1705	862
...	...	1706	859
1652	600	1707	1,226
...
1654	450	1762	617
1655	413
...	...	1773	982
1658	652
1659	388	1781	812
1660	718	1782	482
...
1672	620	1785	811
...
1674	887	1788	439

史料：Fonds Cuzieu, Liasse 37-2, Dîme des vendanges.

さて表5にみる限り、サン＝ラジェ小教区では最小319籠（1648年）から最大1,226籠（1707年）のあいだで10分の1税の徴収量が大きく変動している。この期間、不作の年で300～500籠、豊作の年では1,000～1,200籠以上が徴収されたと考えられる。1782年と1788年にはそれぞれ482籠と439籠しか徴収されていないが、そこに革命前夜の不況局面を垣間見ることでもあるだろう。このようにブドウ収穫量については、まず年ごとの変動が著しいことが特徴といえる。（ちなみにA.シヨレによると、ボーシヨレ地方にブドウのモノカルチュアが定着するのは1900年頃とみられるが、その頃でも収穫の不安定性は変わらず、生産過剰・投げ売りと不作が繰り返されていた。農民たちは4年に1度豊作であれば幸運とみなしていたという¹⁷⁾）。

しかしそれでも、17～18世紀をとおしてブドウ収穫量は全体として増加する傾向にある。1644年

から 1650 年代末までは収穫量の少ない年がめだつが、1660 年前後からは収穫はそれまでと比べると豊かになっている。また、18 世紀には 800 籠を超える比較的高い徴収量がめだっていることも特徴である。とりわけ 1703 ～ 1706 年は収穫が安定し、1707 年の豊作へとつながっていく。サン＝ラジェ領主の取り分である封与 10 分の 1 税も、こうした傾向と連動すると考えてよいだろう。

(3) サンスの収入

サン＝ラジェ領主のサンス（農民保有地に対する封建地代）徴収権は、近隣の 16 カ村に広がっている。土地台帳で穀物やブドウ、その他物品など現物形態で承認されたサンスは、ボージョレ地方の経済的中心地ベルヴィルにおける聖マルタン祭（11 月 11 日）の市場価格をもとに、貨幣に換算されて支払われる（代金納）。サン＝ラジェ領では 1703 年について、当時の土地台帳の内容をまとめるかたちで、16 カ村のサンスの基礎となる穀物・ブドウ酒・家禽・果実・その他物品（一部貨幣を含む）とその分量を示した記録が残されている（表 6 参照）¹⁸⁾。これをもとに、ベルヴィルの「市場価格表」（1660-1785 年）から小麦、ライ麦、燕麥、大麦、ブドウ酒の 5 品目に沿って毎年のサンスを貨幣換算し、その変動を 1660 年代から 10 年平均でたどったものが表 7 である（これら 5 品目だけで、1703 年にはサンス総額の 87.5% を示している。また 1679 年以前についてはブドウ酒価格の推移が不明であり、ブドウ酒を除いた 4 品目から評価した。その場合、サンス総額に占める割合は 86.2% である）¹⁹⁾。

表 6 サンスの現物形態（1703 年、16 カ村）

品 目	分 量
貨 幣	55 リーヴル14 ソル.
小 麦	206 クープ
ラ イ 麦	306 クープ
燕 麦	592 クープ
ブ ド ウ 酒	712 ポ
雌 鶏	61 羽
雄 鶏	10 羽
若 鶏	32 羽
飼 兎	4 1/2 羽
油	54 カルトロン
梨	1 1/4 クープ
ま な 板	75 枚
梔 梔	75 個
大 麦	3 2/3 クープ
賦 役	4 1/2 日
魚	9 梔
オ レ ン ジ	9 クープ
瓦	1,000 枚
石 灰	13 籠
麻	1 1/4 リーヴル
川 カ マ ス	3 尾
胡 椒	1 オンス
不 明	_____

史料：Fonds Cuzieu, Liasse 5, Sommaire général du montant de la rente de Saint-Lager, 1703.

表 7 サンスの貨幣換算額（10 年平均）

年代	サンス評価額 (L)
1660－1669	641
1670－1679	541
1680－1689	548
1690－1699	1,032
1700－1709	919
1710－1719	995
1720－1729	879
1730－1739	947
1740－1749	1,240
1750－1759	1,114
1760－1769	1,329
1770－1779	1,663
1780－1785	1,533

史料：Extrait des calcabaux de la Grenette de Belleville, 1717-1785, etc.

このように、サンスの収入評価額はこの期間をつうじて着実に上昇している。その際、1660-1680年代、1690-1730年代、1740-1750年代、1760-1780年代という段階をへながら上昇していることが特徴である。現物形態のサンスが貨幣に換算されて徴収されるのであるから、当然のことながらサンスの評価額は、価格変動の長期的傾向と多かれ少なかれ連動する。ちなみに周知のとおり、この間の価格の一般的動向は、17世紀中葉から18世紀初頭までの停滞、1730年代からの上昇、1760年代からの急上昇によって特徴づけられている。

ところで、サンスからの収入が価格変動に連動するとしても、実際には評価額のとりの金額が徴収されるわけではない。サンスの滞納が、ほとんど慢性的といえるほど数多く見られるからである。それを示すいくつかの例をあげよう。1707年、「領主権管理人」がサン＝ラジェ領のサンス、保有地移転税およびパンシオンの滞納額の徴収を3,300リーヴルで請負ったが、その後5年間で1,281リーヴルしか回収できなかった²⁰⁾。また、1779年と1781年のあいだに実際に徴収されたサンスの額は平均して年に852リーヴルであり、それは土地台帳をもとに評価されたサンスの総額の約半分でしかない²¹⁾。さらに、1699年から数年間のうちに少なくとも30名のサンスの長期滞納者が、サン＝ラジェ領主裁判およびヴィルフランシュのバイイ裁判に召還されている（滞納20年が11名、29年が4名、30年が1名など）²²⁾。

サンスの滞納がどの程度、領主財政の障碍となったのかを知ることはできない。しかし、その事実をあまりに強調することも適切ではないだろう。滞納がほぼ慢性的に見られたとしても、領主にとってはむしろ織り込み済みであっただろうし、滞納を許さないほど厳格に徴収しなければ領主財政が成り立たなかったとも思えないのである²³⁾。

おわりに

以上で、サン＝ラジェ領の所領収入の構成および変動について考察した。系列史を構成するうえで、史料の連続性は必ずしも十分とはいえないが、それでも、領主財政を特徴づけるいくつかの傾向が浮かび上がってくる。

まず、サン＝ラジェ領の請負料および10分の1税共同徴収者であるサン＝ポール教会の徴収請負料の動向からは、大まかに、17世紀後半から18世紀初頭にかけての所領収入の低迷、そしてそれ以降の増加傾向を指摘することができる。この変化は、一般的な経済史上の変動局面の転換、すなわち17世紀中葉から1720年代までの「不況局面」、そして1730年代からの「好況局面」への転換と大体において重なっている。

第2に、サン＝ラジェ領がブドウ栽培地域に位置することから、所領収入の大部分はブドウ酒販売に占められる。1780年代には、封与10分の1税および直領地小作料にもとづくブドウ酒販売からの収入は、所領収入全体の78%にのぼっている。いいかえれば、領主財政は毎年のブドウ収穫高に大きく左右される。つまり、ブドウ収穫高は17～18世紀をとおして、短期的には豊作と不作が繰り返される不安定さを内包しながらも、長期的には、とくに18世紀に入ると増加傾向を示すのだが、同様の動きがブドウ酒価格、さらには所領収入の短期・長期の変動に反映されるわけである。

第3に、サン＝ラジェ領では、封建地代であるサンスが貨幣ではなく代金納という支払い形態をとるため、サンスの収入の動きは基本的には価格変動に連動する。それゆえ、北部フランスで見られる定額の貨幣サンスの場合と異なり、18世紀初頭からの変動局面の転換（一般的な価格上昇）によるサンスの実質価値の低下はここでは起こりえない。

こうして、これらの事情が重なった結果、17世紀末から18世紀にかけてサン＝ラジェ領の財政規模が拡大する一方で、領主権部分と直領地部分に区

分されるその収入構成は大きく変化することがなかった。あるいは大まかにいって、ブドウ酒販売(封与10分の1税とブドウ畑の小作料に由来する)をつうじ、二つの収入部分の一方が増えれば他方も増えるという関係が維持されていったと考えてよいだろう。

ところで18世紀後半、ボージョレ地方のブドウ酒生産は、リヨンなど周辺市場やとりわけパリ市場の拡大とともに活発化する。それに応じて、サン＝ラジェ領主所有のブドウ畑の面積も拡大している²⁴⁾。領主財政はそれだけ良好だったということになるが、領主がフランス革命を迎えるのはこうした状況下であった。しかしここにいたって、所領収入の3～4割を封与10分の1税やサンスなど領主的諸権利に頼っていたサン＝ラジェ領主は、革命による領主的諸権利の廃止により財政的なダメージを余儀なくされる。経済過程と政治過程を直接関連づけ、また類型化することは厳に慎まなければならないが、革命前後のサン＝ラジェにおける領主財政の急激な変化が、その後のボージョレ地方の領主層(いまや革命前の直領地をもとに、近代的な土地所有者・地代取得者に変貌した)の政治意識、政治行動を考えるうえで一つの手がかりとなることは確かであろう。

引用史料・文献

- 1) 拙稿「17・18世紀サン＝ラジェ領の経済構造」『土地制度史学』第110号、1986年1月、24-42頁。「18世紀ボージョレ地方のブドウ酒生産—パリ市場との関連で—」『文化経済学とコンピュータサイエンス』(共編著)所収、兵庫県立大学政策科学研究叢書、2012年3月、1-22頁。
- 2) オーヴェルニュ地方について、領主財政の悪化と領主刑事裁判費用の支出との関係に最初に着目した次の研究は現在でも重要である。Abel Poitrineau, *Aspects de la crise des justices seigneuriales dans l'Auvergne*

du XVIIIe siècle, *Revue historique de droit français et étranger*, 1961, p. 552-570.

- 3) Archives départementales du Rhône, Série E, Famille, Fonds Cuzieu, Seigneurie de Saint-Lager.
- 4) Ibid., Liasse 25, Copie de ce que j'ai écrit au bas du dénombrement des revenus (de la seigneurie), 1673.
- 5) Ibid., Liasse R, Livre de compte de la recette, 1782-1790.
- 6) Ibid., Liasse 25, Bail à ferme (de la seigneurie), 14 octobre 1615.
- 7) Ibid., Liasse 25, Bail à ferme, 29 janvier 1671.
- 8) Ibid., Liasse 25, Bail à ferme, 5 avril 1673.
- 9) Ibid., Liasse 25, Bail à ferme, 28 juin 1681.
- 10) Ibid., Liasse 25, Bail à ferme, 6 novembre 1694.
- 11) Ibid., Liasse 25, Bail à ferme, 6 juillet 1701.
- 12) Ibid., Liasse T, Copie de l'adjudication par sentence de décret des 2/5 de la terre et seigneurie de Saint-Lager, 1695.
- 13) この時、テリエールの領主に属する、4リーヴル5ドゥニエ・ヴィエノワ、雄鶏1羽からなるサンスが、一連の差し押さえと競売の対象から除外されたが、「80リーヴル一括払いで買い戻し可能」とみなされている。サンスとその買い戻し額の比率は6～7%と推察される。
- 14) Ibid., Liasse 37-1, Foy homage à Saint-Paul de Lyon, mars 1245 (copie).
- 15) Baux à ferme de la dîme. 1702、1737、1755、1761年については、A.D.Rhone, 13G 891 ; 1717年については、A.D.Rhone, Dépôt des communes, Saint-Lager, Liasse 1 ; 1777年については、Fonds Cuzieu, Liasse 37-1.
- 16) Ibid., Liasse 37-2, Dîme des vendanges.
- 17) ブドウ収穫高の変動幅の大きさは、ブドウ酒価格の短期変動に反映される。ベルヴィルでの物価(毎年11月11日)の動きをみると、18世紀のブドウ酒価格は、小麦・ライ麦な

- どの穀物価格に比べてその変動幅は大きい。
Cf. Edouard Gruter, *La naissance d'un grand vignoble*, Lyon, 1977, p.176, 《Les cours des denrées à Belleville》. André Cholley, Notes de géographie beaujolaise, in *Annales de Géographie*, 1929, p. 26-46, surtout p.34.
- 18) Fonds Cuzieu, Liasse 5, Sommaire général du montant de la rente de Saint-Lager, fait par le Sieur Charier commissaire à terrier, en 1703.
- 19) 1634-1750 年のベルヴィルの「市場価格表」については、Edouard Gruter, *op.cit.*, p.176, 《Les cours des denrées à Belleville》. 同じく 1717-1785 年については、A. D. Rhône, Série B, Justice de Belleville, 1703-1785, Extrait des calcabaux de la Grenette de Belleville, 1717-1785.
- 20) Fonds Cuzieu, Liasse 4 ter, Transport passé par M. Le Baron de Saint-Lager à M. François Charrier, 24 octobre 1707. Ibid., Mémoire de ce que Charrier a reçu de la rente de Saint-Lager, 9 mars 1713.
- 21) Ibid., Liasse 5, Recette des servis, 1781.
- 22) Ibid., Liasse 9 bis, Assignations en paiement d'arrérages des servis, 1699-1704.
- 23) サンス徴収の不規則性については、前掲拙稿「17・18 世紀サン＝ラジェ領の経済構造」参照。
- 24) 前掲拙稿「18 世紀ボージョレ地方のブドウ酒生産」参照。
- (4) Large, Jean. *Familles et patrimoines en Beaujolais(1760 - 1914)*. Villeneuve, 2002, t.1, 199 p., t.2, 138 p.
- (5) Poitrineau, Abel. Aspects de la crise des justices seigneuriales dans l'Auvergne du XVIIIe siècle, *Revue historique de droit français et étranger*. 1961, p. 552-570.
- (6) 遅塚忠躬「17・8 世紀ルアン大司教領の経済構造—領主経済の構造と変動—」『社会科学研究』1963-1964 年, 第 15 編第 3・4-5 号.
- (7) 遅塚忠躬「ルアン大司教領ディエップ市における領主的諸権利 (17-18 世紀)」『お茶の水史学』1997 年, 第 41 号, 111-172 頁.

参考文献

- (1) Cholley, André. Notes de géographie beaujolaise. *Annales de Géographie*, 1929, p. 26-46.
- (2) Durand, Georges. *Vin, Vigne et Vignerons en Lyonnais et Beaujolais, XVIe-XVIIIe siècle*, Lyon, 1977, 540 p.
- (3) Gruter, Edouard. *La naissance d'un grand vignoble*, Lyon, 1977, 191 p.